学苑　第九五三号　三九～八三（二〇二〇・三）

〔資　料〕

妙幢淨慧撰『古今舎利驗論』翻刻と解題（三・了）

関口静雄

〔解　題〕

妙幢淨慧撰『古今舎利驗論』下巻（本末二冊）を翻刻紹介する。

下巻は本末十五項目からなるが丁付は一通し、上巻（一冊）・中巻（本末二冊）に引き続いて種々の舎利話譚を収める。全巻を一読すると、淨慧の抱いた関心の一つに舎利の真偽判別法があったと知れる。あるいは念願希求してようやくに、あるいは父祖伝来の、あるいは想いもよらぬ機縁によって舎利をわが手にしえた比丘や比丘尼また篤信者たち道俗がこぞって、その舎利がよもや釈迦の真身の舎利ではあるまいか、あるいは名高い聖僧の真骨ではないか、あるいは瓦礫のごとき凡骨ではないのかと、その真偽を懸念して判別を試みようとする。色はどうか、水晶の玉のようであるか、靨はあるか、水に入れて浮かびも沈みもしないか。真骨舎利は金剛のようであって、たとえ鉄鎚で打っても砕けぬというがどうか等々、淨慧は彼我の聖教典籍に載る種々の舎利霊験譚と舎利真偽判別法を示し、さらに自身の見聞を多く録している。しかし淨慧にとって、わが身の周縁で鉄鎚をもって舎利を打つような人間がいたことにはいささか驚いたようで、ことに心を惹かれたのであろう二話を記している。

上巻九「一二肉舎利破壊ノ相ヲ示玉フ事」に「アル人ノカタラレシハ」として、近ごろ信州善光寺の傍らに一寺を再興した迎接という一心専念の遁世行者の発心因縁譚が紹介されている。迎接がみずから語るには、自分は賀州の生まれで弓馬に携わる身だったが、早くに逝った父は平生から深く舎利を信じ、十粒ばかりを舎利塔に安んじて常に礼敬していた。その舎利を譲り受けたが自分はもとより不信無道で、よもや真骨の舎利ではあるまい、試みに打って真偽を確かめようと、ある日粒々を並べ置いて鎚をもってこれを打った。舎利は残らず砕けたのでやはり仏舎利ではなかった。父が誑かされていたことを不本意なことよと思っていたが、しかし真の仏舎利ではなかったけれど、さすがに我が父親が生涯信敬し、終に臨んで懇ろに附属せられたものなので、たとえ何にせよむだむだ打ち砕いたのは人の道に外れた所業であったと後悔の念切なるものがあったし、棄てるに忍びなく、砕いた舎利を別々の紙に包んで机上に並べ置いておいた。するとその夜、夢に一人の僧が現れて、「汝は今日仏舎利を砕いた。無間地獄に堕ちる所業を犯したのだ。一刻も早く至心に懺悔せよ」と告げた。自分が「真実の仏舎利ならなんで砕けるのか。砕けたのだから仏舎利ではない。なぜに無間地獄に堕ちる所業というのか」と反問すると、僧は「仏舎利といっても砕けないわけではない。たとえ砕けても仏舎利には霊験があるのだ。試みに懺悔し礼念してみるがよい。験があるはずだ。わたしは汝に宿縁があるのでそう告げるのだ」という。大汗をかいて覚め、驚き恐れて夢告のように懺悔しようとは思ったが、奉公の身なのでその暇がなく、心ならずも日を送ってしまった。漸くある日の夜、かの舎利を並べおき、暗室に独坐して一心に念仏し、観音の名号を唱えて礼拝懺悔した。するとまさに夜半になろうという時、紙包の中から光明が放たれた。大いに驚いて火を灯して見ると、十のうち二包の砕けた舎利は角が取れて円満になっていた。以来この二包の舎利を常に信敬し、三宝を尊んで因果を慎んでいると、知合いの餌指が山路に迷って畜生原へ踏み入り、悪縁に遭って生きながら背に牛の毛を生じ、ようやく逃げ帰った出来事を見聞した。以来ますます因果を恐れ、厭離の心が深くなって、こうして遁世門に入ったのだと語っ

たという。

下巻本七「人師ニ不壊ノ舎利アル事」に、洛東一心院の飛舎利について触れている。群仙山一心院の開山称念上人はもとより博識多聞であるうえに一向専修の行者であって、その平生の瑞験や臨終歿後の勝相は真誉上人の記や当院の所伝に明らかであるが、中でもその舎利はきわめて堅固であった。上人の墓処はもとは紫雲水の辺りにあったが、故あって滅後四十九年に至って墓易えをすることになった。僧徒が多く集まって土を掘り除け棺槨を取り出した。見れば少しも朽ち破れてはいなかったが、舎利数粒が棺槨の上にあった。衆僧は奇異に思いながらもこれを拾い取って厚信の輩に分かち与えた。上人の舎利を得た者たちは深くこれを信じ、塔に入れて礼敬した。八坂のほとりに住む女も上人の舎利を得て長年信敬していた。しかしある時いささかの疑念が心に生じ、真骨かどうか判別を試みようと舎利を石の上に置いて鉄鎚で打った。すると忽ち舎利は声を挙げ、光を放って虚空にのぼり、虹を引いたように一心院を指して飛び去った。驚いた女は光明を逐って走り行くと、舎利は一心院の称念上人の御影の手の間に落在していた。女はみずから寺僧に件の所業を語り、ますます渇仰を生じた故に舎利の返還を請うたが衆僧は返さなかった。今に一心院の霊宝として伝わり、世に一心院の飛舎利というのはこの舎利のことである。

浄慧は鉄鎚の縁ともいうべき右の二話をもとに聖教典籍を引いて云々し話を深め広げるのだが、迎接が父親から附属せられた舎利はいわゆる小乗にいう肉舎利で、それは時により破壊の相を示すが、しかし不信無道の迎接が鎚をもって砕いたことからその心に悔を生じ、光明を放って形円満の相を示したことから信を起こし、ついに出家して専修の行者になったと、砕かれた舎利の霊験を讃している。さらに一心院の飛舎利の縁起を記し、この舎利を「人舎利」と称し、南宋の晦岩法照撰『読教記』巻十四「舎利相伝」の一節に「一生修行スルモノハ其火焼トモ壊セズ。コレヲ撃トキハ砕。二生修行スレバ焼ドモ。撃ドモ砕ズ三生ハ但クダケザルノミニアラズ。亦光明アリトイヘリ。コレヲ以コレヲミルニ。羅漢菩薩幾ヶ生幾ヶ刧カ如法ニ修錬シテ。三学ヲコタラズ不壊ノ信力。金剛ノ悲願。生々相續シテ疲退セザルヲヤ．アニ金剛不壊ノ骨舎利ナカランヤ。」とあるのを引いて自説を展開している。

浄慧が右の二話を鉄鎚の縁ともいうべき例として挙げたのは偶然ではあるまい。鉄鎚をもって舎利を砕いた話は彼我の典籍稗史に少なくないからだ。二話に通底するのは、信州善光寺の傍らに一寺を再興した迎接が一心専念の遁世行者であり、飛舎利は一心院開山の一向専修行者称念上人の舎利であって、ともに遁世の念仏専修の行者にまつわっての話譚であることだ。さらに迎接の周縁には食鳥を捕って日を送る餌指がおり、一心院一流の周縁には上人の舎利を分与されるほどに親近した厚信の信徒たちがいるのであって、迎接も一心院衆僧もきわめて衆庶に近しく、一向一心専修の行者と厚信の檀信徒の間に格別の壁差は見出せないのである。信州善光寺は民衆寺院として世俗にもっともよく知られた存在であり、一心院は捨世地の本山であって規律を護って修行する遁世僧たちの結集であって、ともに衆庶巷間との交流は広くまた深い。浄慧が唐土のではなく、我邦のより卑近な例を引いた理由がそこにある。

浄慧のいう「真誉上人の記」というのは洛陽京極高辻霊芝山乗願寺十世成蓮社真誉が書写しおいた『一心院覚書』[1]のことだと思われるが、それには称念が天文二十三年（一五五四）二月に衆僧に示した法度九箇条が収められていて、「一、行住座臥ニ可住二欣求浄土念一事」「一、仰二一向専念ノ金言一ヲ、信二一心専念ノ教誡一ヲ、抛二諸ノ雑行一ヲ、可レ成二一向専修之身一事」「一、為二一向専修ノ行者一ト、一心ニ願二往生極楽一ヲ者ノハ、深ク止二憍慢心一ヲ、弥ヨ持二卑下心一ヲ、三宝可レ奉二恭敬一シ事」等々の条目が見える。浄慧もこの九箇条をはじめ称念の定めた法度類を知っていたはずで、その内容に少なからず共感していたと思われる。浄慧は身分の高下に関係なく緇白と交流し、また四宗兼学と称されたように宗門宗派を超えて交流したが、しかし緇流との交流においては、右の称念法度九箇条にも見られるような、その基本は三宝恭敬・持律持戒の尊重にあり、その枠内にあれば遁世者や一心一向の専修者、また木食たちとも好んで交友を結んでいたのである。

※

みずから西方行者称念と称した縁誉称念（一五一三―一五五四）は、天文十七年（一五四八）秋、知恩院山内法然上人御廟の傍らに草庵を結んだ。

後にこれが捨世地の本山となった一心院であるが、称念は世俗化する寺院や形骸化する僧侶を嘆じ、法然の念仏思想に立ち返ろうと清閑な地において厳粛な清規による専修念仏一行を励んだのである。『称念上人行状記』[2]巻下に「出家中の遁世にして眞の出家なるを捨世とは名付たるなり」とあるように、捨世とは「出家中の遁世」「眞の出家」をいうのであって、必然それは名利を嫌忌し念仏専修のために隠遁生活を送ることになる。江戸時代にはそうした捨世のすぐれた僧たちが輩出し、各捨世地に一流を建てた。たとえば弾誓流（洛西古知谷阿弥陀寺）弾誓・澄禅、獅子谷流（洛東法然院）忍澂、無能流（磐城桑折無能寺）無能・不能、関通流（洛中転法輪寺）関通、大日比流（長門大日比西円寺）法岸・法洲・法道、厳島流（安芸厳島光明院）以八・学信、徳本流（小石川一行院）徳本・徳住・徳因・本察等々であって、そのほとんどはまた木食行を兼修する捨世僧であった。

浄慧が、近江日野平子にいた木食進誉澄禅を古知谷に招請したその弟子中川常宇と交友があり、常宇が林丘寺宮光子内親王と親しく、二人がともに施財した法然院の忍澂は地蔵信仰を通じて浄慧と昵懇であり、忍澂はまた黄檗の獨湛と極めて親しい法友であった等々をかつて指摘しおいたが、[3]ここにまた浄慧が浄土木食を自称する江戸池之端影向山心行寺三世本誉空無と昵懇であったことを指摘できる。空無は石州石見の人で寛永七年（一六三〇）十二月に生まれ、長寿を保ち享保五年（一七二〇）正月九十一歳のとき『十夜念仏発願由来根元記』を撰述しているが歿年は明らかではない。九歳にして幡誉上人に投じて剃染し、十三歳にして江戸下谷池之端幡随意院神田山新知恩寺に入り、二十二歳のとき武州三縁山増上寺に隷した。二十四歳のとき陰を自殲して婬欲を断ち、各地を修行して明暦年中（一六五五―五七）に心行寺三世を継ぎ、開山円誉利的上人創始の万日念仏会を再興した。貞享元年（一六八四）五十四歳のとき疾を得て院主を辞して萱町の荷葉菴に退隠したが、木食行に加えて不持斎を行ずるなど厳しい日々を送り、元禄三年（一六九〇）四月には万日念仏会を満散した。そのころ厚信の俗家所蔵の木造地蔵菩薩像を譲り受け、これを木型として銅鋳六軀を製し、京の六地蔵に倣って武城六所すなわち駒込向丘の浄土宗桂芳山瑞泰寺・駒込千駄木林の浄土宗一心山専念寺・谷中新堀村諏訪社の真言宗宝林山浄光寺・下谷池之端萱町の浄土宗影向山心行寺・上野の天台宗東叡山寛永寺大仏堂内・浅草の天台宗金龍山浅草寺中正智院に安置した。これがいわゆる初めの六地蔵であるが、その設置場所は宗門を超えている。ここに浄慧に通じる性格が垣間見えるが、そも空無の六地蔵発願建立には浄慧の行実が深く影響しているのである。

空無の門弟子某等が元禄庚午年臘月朔日に編じた『心行寺第三世源蓮社本誉空無上人行状』[4]によると、月日は明確ではないが、元禄庚午年すなわち元禄三年（一六九〇）中に、空無は厚信の俗家から木造地蔵菩薩像を譲り受けると、これを木型として銅鋳六軀を製し、武城六所に安置したと伝えている。おそらく開眼供養もすぐに執行されたのであろう。空無の発願は驚くほどきわめて短時日に成就したのである。空無はその後木造地蔵菩薩像に彩色を施し湯島霊雲寺に奉納したが、[5]住持覚彦浄厳はこれを受けて地蔵堂を建立し供養法会を営んでいる。さらに後年空無はその顚末と六地蔵の霊験利益をみずから『巡六地蔵慈悲利益記』[6]に著述して松会三四郎から板行したが、この書の巻頭には増上寺三十二代念蓮社貞誉自然了也と同三十四代真蓮社證誉独清雲臥の「武州六地蔵結縁証明書」と、宝永四年（一七〇七）孟陬人日付の幻化散人すなわち妙幢浄慧撰「巡六地蔵慈悲利益記序」が付されていた。自著の序文を同門の師友ではなく、他門黄檗の禅僧浄慧に依頼していることからも両人の交友の深さが窺い知れるが、空無はその『利益記』第二十五「谷中感應寺京都壬生延命地藏移造立之事」に、妙幢浄慧禅師は四宗兼学で、その行法は堅固であり、ことに仏菩薩を造立しようとの志は諸僧を超越していて、武州に二度も八尺坐像の地蔵尊像を造立したほどだ。一躰は東叡山内に建てたが累焼に遭ったので場所を移して再興し、かさねて京都壬生寺の地蔵菩薩の写しを谷中感應寺に造立した。この尊躰は京の仏師法橋瀧河順正が六齊日を行じ精進潔白にして製作したもので、脇士に掌善・掌悪の両童子を配した七尺五寸の立像であったが、時に妙幢禅師はその助勢を四蓮の不著と雅丈に命じられた。壬生寺は仏師定朝が地蔵菩薩を造立し三井寺の快賢僧都が中興したものであって、まことに順正は定朝の再来、妙幢禅師は快賢僧都が応化して壬生地蔵を江戸に建立したごとくである。ことに地蔵薩埵の悲願を仰ぎ男女に信心の利益を

施さんことを深重の誓願とする妙幢禅師は、『地蔵菩薩秘記』に「妙幢とは地蔵の異名なり」というから、これを名躰不離と見れば、地蔵がすなわち地蔵を作ったことになる」と絶賛している。空無の年若い淨慧に対する心酔ともいうべき傾倒ぶりが彷彿する。なお淨慧が仏師順正の助勢を命じた「四蓮の不著・雅丈」は四蓮の意は不明だが、不著は篆刻家池永道雲の実兄、雅丈は覚彦淨厳と交流した人物と思われる。淨厳の雅丈宛書状が早稲田大学図書館に残り、『仏神感應録』巻第十三九「霊像ノ彌陁尊種々ノ現益ヲ施玉フ事」は池永家の守本尊にまつわる話譚であるが、その一節に「餘慶流テ今其孫不著淨蓮ノ兩兄弟ニイタリ。…不著ハ。スデニ出塵ノ身トナリテ靜ニ勤修セラル。淨蓮ハ護法ノ居士トシテ。世出兼ツトム」とある。淨蓮は道雲のことであって、道雲撰『篆髄』に寄せた畏友細井広沢（一六五八―一七三八）の叙文に「其兄黙爾氏蚤脱世網。一峯近來移居其鄰。相與事金仙氏」とあるから黙爾と不著は同一人と考えられる。不著・道雲兄弟はともに寺住まいをしたというが、おそらく深川海福寺であろう。[7]

※

我が国篆刻印譜の嚆矢たる『一刀萬象』で名高い江都市隠一峯すなわち池永道雲との交友は、淨慧の生涯にひときわ光彩を放っているように思われる。『一刀萬象』と道雲の人となりは幕末明治の鋳金家・篆刻家中井敬所（一八三一―一九〇二）撰『日本印人伝』[8]が最もよく伝えていて、斯界の解説書や評伝はほとんどこれに據っている。今その全文を転載する。

池永一峰、名は栄春、あざ名は道雲、通称は有右衛門、一峯はその号なり。また市隠・山雲水月主人等の号あり。江戸の人。その先は相州小田原の土豪たり。文禄中、東照公の徳を慕い、江戸に来たる。すなわち宅一区を本町に賜い、世々薬を鬻ぐをもって業となす。人となり恬澹、少にして学を好み書を善くす。篆字に精しく、鉄筆に工みなり。また竺典を修し上乗に入る。家を治むること慎密、庭訓方あり。かつ慈恵、施に務む。その余暇、明窓浄几、文墨を左右にし、興到れば則ちあるいは揮毫し、あるいは奏刀し、倦めば則ち琵琶を鼓し、平家の曲を奏す。悠然として自適し、曰わく、「これ吾が至楽、もって加うるなし。」と。その交友中、細井広沢と最も親しみ善し。年知命に及び、業をその子に伝う。江東に卜居し、角巾野服、逍遙もって老ゆ。著わす所、篆海・篆髄・文字双珠・聯珠篆文・三体千字文・篆書大学・漢唐宋名文篆書・一刀万象・元禄正徳年間印譜・享保宝永年間印譜・異文合愛等五十余巻あり。その一刀万象の出ずるや、世伝えてもって珍となす。清人韓客も亦序を作りて称讃を極む。ここにおいて名声四方に噪がし。縉紳諸侯争いてこれを求め、使者門に聚まる。一峯、頭を掉り肯んぜずして曰わく、「この本の捺装は一百部を限り、もって相識に頒つのみ。」と。たまたま天使権大納言藤原俊清・参議菅原長義、東下してこれを聞き、人をして乞わしむ。一峯また肯んぜず。そのこれを霊元上皇および妙法院法親王に上ると聞くに及び、曰わく、「市人の薄技、九重に達するを得たり。何の幸栄かこれに加えん。」と。即ち鋭意捺押し、装帙もって呈す。上皇殊に嘉称したまい、御香花橘を賜う。一峯元文二年七月十九日をもって没す。その前三日、親戚故旧と会し、沐浴訣れを告げて曰わく、「吾まさに道山に帰休せんとす。」と。戛然として琵琶を鼓し、平家二曲を奏す。遂に喪事を指示し、自ら墓碑を勒し、溘然として逝けり。時に年七十有三。（寛文五―一六六五―元文二―一七三七）＊江戸浅草誓願寺受用院に葬る。息を道習という（龍谷大学蔵写字台文庫印譜）。

右によれば池永道雲は寛文五年（一六六五）の生まれで、元文二年（一七三七）七月十九日に七十三歳で歿している。生誕地は不明ながら江戸日本橋本町あるいは日本橋箱崎町と思われ、墓所は東京練馬区練馬浄土宗田島山受用院にある。中井敬所は本所の人だが、京橋生れで八丁堀に竹問屋竹清を営み、書誌学と篆刻に通じた三村清三郎（一八七六―一九五三）は池永家と交流があったらしく、その著「池永道雲」（『書苑』六巻一号（昭和十七年一月））に、池永家十四代康太郎氏の「記」によるとして、池永家初代榮壽通称有右衛門が東照公を慕って江戸に移住したのは文禄二年（一五九三）のことで、地を本町三丁目に賜わり、そこで代々薬屋をしていたこと、五代一峯は箱崎町の新山仁左衛門から養子に来た人で、荻生徂徠の『蘐園談餘』だかに、一峯の家でテレメンテイコという薬を売っていたと記してあったこと、徂徠は増上寺の覚玄上人を通じて一峯に篆印を頼んでいたこと、また池永家代々を「初代榮壽慶長十二年歿・二代榮信元和九年歿・三代正順寛文十二年歿・四代道球延宝六

年歿・五代道雲一峯元文二年七月十九日沒七十三歳・六代榮陸宝暦十三年歿」等々と伝えている。康太郎氏の「記」というのは池永家十六代当主家所蔵『池永道雲略歴・著作・黄檗山諸上人との交渉・細井廣澤との親交・本尊阿彌陀佛縁起・佛神感應録抄』(仮綴装一冊)と思われるが、その「池永道雲と黄檗の諸上人」条に、「道雲は幼より好學の志篤かりしがまた年少既に佛道に歸依深く、はやく大乘の奥義を悟了せり。道雲の母は法名妙矩元規信女元禄元年十一月三日歿道雲二十四歳の時と云ひ池永家三代の嫡女にして父は新山仁左衛門法名珠海道球居士延寶六年四月五日歿道雲十四歳の時といひ池永四代を繼ぎ道雲は池永五代の後嗣なり。」と道雲の父母についての記載がある。これによると池永家に入婿したのは道雲ではなく、その父新山仁左衛門法名珠海道球居士であって竹清の所伝と異なる。なお池永家をめぐっては『浅草寺社書上甲四』[9](文政八年十一月付誓願寺役者智典善定書上)誓願寺受用院条が参考になろう。

一池永道雲先祖

命譽称壽居士慶長十二未八月十一日俗名不相知法名斗石塔有之候

相州小田原より御當地江文禄二癸巳年ニ引移り申候尤今年迄百四十三年其故ハ小田原ニ妙光山誓願寺ト申浄土の寺有り此寺二代の住持東譽魯水和尚と申僧神君様御帰依之僧ニて江戸江被召連候ニ付池永先祖も旦那寺ニて念比ニ有之候ニ付同道いたし江戸江引越申候今本町住宅之地□□已來所持いたし候已前本町者御城内ニ有之。池永屋敷ハ龍之口ノ邊の由ニ申傳候寛永年中今の場所ニ移り申候　魯水和尚も文禄二年當山於建立開山被成給ぬ

神君様鐘楼御寄附の鐘の銘文ニ委しく有之候今以佛殿の前ニ有之候

一開祖　三蓮社寶譽長菴和尚寛永七午年十一月廿二日寂　但シ當住迄十弐代

一門額　壱　長安院　　玄関額　壱　至真道

一佛像前額　壱　正徧智　不残池永惣右衛門書

一坪数　間口拾七間四勺　奥行拾間四勺　惣而弐百六拾七坪八合八勺六才余

一當院起立之儀者寛永年中建ト申事ニ御座候得共由緒書等ハ明和九辰年燒失仕一向相分り不申候

受用院

右書上は池永家初代の俗名を不明とする。しかし法名は命譽称壽居士というから俗名も称壽であったと思われる。とするとこれも竹清の所伝に疑問が生ずる。また扁額をすべて揮毫した池永惣右衛門なる人物にも関心が向くが、いずれにしても道雲の父方が新山家に出自することは慥かなようである。しかしその新山家から池永家に父が、あるいは道雲が入ったものかどうか分明にしえない。なおまた小田原時代の誓願寺の山号が妙光山であり、家康の帰依僧東譽魯水とともに池永家が江戸に移った事情の一端が知られる。御城内龍之口は現丸の内一丁目、日本工業倶楽部ビルが建つ。十四代康太郎氏のころにはすでに本町筋からてりふり町に移り、屋号を名護屋と称して刃物金物商を手広く営んでいた。

※

『一刀萬象』一帙三冊を贈られた浄慧は詩文『都智山印韻誌』を詠じ、もって道雲を讃仰している。西尾市岩瀬文庫蔵松平君山写『一刀萬象後集』[10]人冊にその詩文が載る。

都智山印韻誌

東都沱永氏道雲居士嘗自撰一刀萬象爲其書也羣印星輝葩羅士君子得覧者竒之珍之賞稱弗能措焉往辛卯之稔偶値朝鮮國三使來聘雲公時應他勸而頼价寄贈一帙三冊于彼學士李東郭電眸屢注瞿然而驚肅然而嘆以爲未曾有矣聿裁題辭極稱妙緻且其敘中有𠀋言能握管者篆而已矣𠀋能操刀者鑱而已矣苟有能篆而能鑱者豈非天才人工之俱至者乎幻以謂曾聞魏受禪碑梁鵠書而鍾繇鐫之又趙文敏好作碑必挾能鐫者與偕不肯落他人之手可見雖是梁鵠之書文敏之𠀋𠀋可見雖𠀋才而不能兼之陳留謝肇淛有謂縱有名筆初而不得妙工本來面目十無一存矣况欲得其神采哉是箇二人則雖自不能鐫之而猶屬之良工可謂善擇者矣若夫姑蘇馬生莆中曾氏之屬則雖獲能刻之名而未聞自書之事但傳李陽冰自篆自刻曠礪支那三韓其希有也可知矣何况　本邦乎宜哉東郭之不恪讚詞也幻與雲公爲方外之交也舊矣曩既得惠一部實不耐慶幸之至自謂襲藏長爲山院之竒什矣今增有感于東郭之弁言而漫贅蕪詞以竊謝其厚志又以傳其所由若夫雲公之實錄及印譜之褒揚則詳于諸賢之序故畧之爾雲公素重儒又歸佛若推竊不已則證開佛祖心印顯現海印三昧亦未可測焉是所以預要雲公也

正德第二壬辰暦仲夏下澣

駿洲嶋田驛都智山白巖禪刹

現住沙門空幻子浄慧欽識

右の『都智山印韻誌』は、道雲が『一刀萬象』を自撰するや、披覧した者たちはこれを奇とし珍として称賛したが、折しも来朝した朝鮮国三使に人の勧めによって同書一帙三冊を贈ったところ、製述官の李東郭から支那三韓にもない希有なものだと恪しみない賞讃を得たと伝え、「幻與雲公爲方外之交也舊矣」と道雲との交友は旧くかつ昵懇であって、ために他よりは曩く恵贈されたことを幾分の誇らしさを込めて記し、さらに道雲が儒仏にも通じた人物であると讃している。この詩文奥には「正徳第二壬辰暦仲夏下澣」「嶋田驛都智山白巖禪刹現住沙門」とあるから、そのころ淨慧は島田市御仮屋に宝山最頂禅師が開いた白岩寺第三世住持位にあったのである。なお趙泰億を正使とする朝鮮通信使の来朝はその前年正徳元年（一七一一）のことで、十月十八日に江戸に入り、翌二年三月九日に帰国している。『一刀萬象』の初刊の年月日はいまだ明確にされていないようだが、水田久紀氏の労作『日本印籍年表』（中田勇次郎編『日本の篆刻』昭和四十一年十二月二玄社刊所収）正徳三年条に「一刀萬象四冊池永道雲刻」とあって正徳三年（一七一三）に四冊本が版行された由だが、しかし右の『都智山印韻誌』の記事と日付を見れば、それ以前すなわち正徳元年までにはすでに初刊されていたと知れ、「嘗自撰一刀萬象」とあるから成稿はさらにそれ以前と知れる。おそらく一帙上中下三冊が原装であって、正徳三年の四冊本はそれを四分冊に改装したものか、あるいは新たに一冊の増補があったものかどうか明らかではない。しかし道雲歿後に描かれた山廣峯画・橘枝直賛の肖像画『道雲弄琵琶図』中に「一刀萬象前後七巻」とあるから『一刀萬象』は次第に増補されたと考えられる。因みにこの肖像画は退隠後に隅田川畔の清秀南軒に居して生涯愛弄した琵琶を弾く在りし日の道雲を描いたものだが、賛の意と日付を重んじ、これを三十年忌のための製作だとすれば、道雲の歿する三日前の姿を写したものかとも思われる。賛は次のようにある。

山廣峯画『道雲弄琵琶図』

此翁氏ハ池永名ハ榮春号ハ一峯字ハ道雲いとけなかりしより篆文といふものをめて好ミ説文の書に通し印譜一刀萬象前後七巻其外とり〳〵十種三十餘巻篆書八種二十九巻をあらはせりそれか中に一刀萬象ハ掛まくも綾にかしこかりし　御あたりにてももてはやせし賜ひ吾國のミかことさえくから人さへにめて　したひて序跋を書て贈るもあり五十歳にして大都會をはなれ隅田川の向に寂なる廬して住けり　生涯親族につきてもいさゝめのうれはしき事をきかす足る事を知て明暮を樂しミみまからんとする三日前に命のかきりをしりて手つから牌にしるし其日になりて親族をまねきて其身ハ浴室にて沐浴し折ふしの心やりにもてあそへる琵琶を弾き平家二曲うたひて親族に別を告て今年七十三歳といふ元文二年文月中の九日に睡るかことく終ぬさこそ子孫に訓へ置書遺せる事も有ぬへし今にして家の式ミたるゝことなきにて知りぬ猶行末の代〻もかくそ有へし此有けるやう八十五叟橘枝直に書しむるハ安永五年五月の事なりけらし

※

池永道雲には多くの著作があって、中井敬所は「五十余巻」と云い、橘枝直は「とり〳〵十種三十餘巻篆書八種二十九巻」と伝える。その多くは戦禍震災によって失われたが、池永家後裔が秘襲する自筆文書等を池永康太郎氏の代、昭和十五年に宝田正道氏が応召直前の間隙を縫って調査せられ、「千呆禅師の弥陀夢感記に就いて」（『浄土学』十八号、昭和十七年三月）・「池永道雲をめぐる書儒諸大家」（『書と友』第八巻八号、昭和十七年七月）にその当時の現状を報告されている。[11] 中に池永家の守本尊安阿弥快慶作阿弥陀如来像に添えられた縁起書二種の翻刻紹介がある。それによるとともに巻子本で、一本は黄檗六代千呆性佞撰文自筆の『彌陀夢感記』、他一本は池永家五代道雲撰文自筆の『池永家傳阿弥陀佛縁起』であるが、惜しくも誤植が散見し、『池永家傳阿弥陀佛縁起』は前半部のみの翻刻で後半部を欠いている。このたび池永家十六代当主家に所蔵される池永家伝来什宝を閲覧する機に恵まれ、右二種の縁起とは別に、阿弥陀如来像の胎内に縁起一巻が秘蔵されていたことを知った。外題等書名はないが道雲の撰文自筆本である。「胎内蔵縁起」と仮称し、先ずこれを翻刻する。

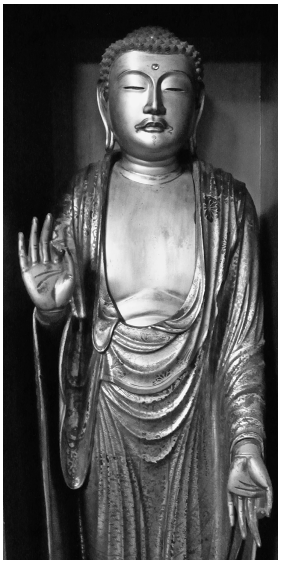
☆

〔胎内蔵縁起〕

夫安養教主の本誓ハ浄刹得生の直因とのミ思ふに穢國済厄の勝利ある物をや予か家に尊崇する所の本尊は安阿弥陀佛の彫刻せる二尺五寸の灵像なり此本尊を家に傳へて崇め來る來由は祖父（沱永有右衛門栄知法名専誉正順）當處に生れて嬰児の时慈父にをくれ悲母（覚誉光圓）の撫育にて日を送るに元和甲子の年（于时十二才）居住にならふ隣の町ある商賈の家にて白銀を秤量にかけてはかるを盗人の見て白日に謾りにつかみ逃去に我家に入來りうしろの道より出失侍りぬ此事を廳に申にほとりの人の浮言にハ彼盗賊をとらへさる誤り少からす家財や沒収せられんといふを母の老ぬる心にかなしみて丹心をこらして是を佛神に申にある夜見る夢に僧一人弥陀の尊像を持て此仏を求めて安置せよ信心他なくハ家を世〻にすへしとなり覚てこれをあやしふに日ありて八王子といふ處の住僧とか本尊を麦のしへにつゝミ椋の木を簀にあみて掩ひはからさるに持來して附与せん事をいふ前夜の夢をおもひて拜し奉るに夢中に見しにたかハさる事函蓋相應したるかことし是を感得して祈請し奉るにかの難もことなくのかれ侍りぬ又年ありて仏に香花をとらしめむかために扶持し侍る尼の料足をうしなひてその過ある人を罪し給へとほとけになけき奉るに仕女まき俄に指を腫して苦しミ我あやまりを佛前に懺悔し療をくハへす愈ぬ且目をやむものゝ祈りて治する人の多きを見侍りぬ明暦丁酉の年舞馬の変に庫藏の世に殘るハ希有なりしにも此本尊を納し藏の火災をのかれ侍る是この事はひとへに廣済衆厄難の本のちかひをたかハせ給はぬを日にまし月にこえ年を重ねて渇仰の思ひをなし侍るしかるに此年ころ荘厳も香煙にすゝけて金色ひかりうすく侍るを見るにやむ事を得すして某栄春（沱永有右衛門法名浄蓮香岸）法橋祐正といふ佛工におほせて再興したてまつりなかく予か家に殘し人の寶になさくらん事を思ひかつは此事を子孫のをろかなるに知しめんと元祿八の年心を發して猶現當の護念を祈り申といふ事しかり

元祿八乙亥年五月三日
武藏國江戸本町三丁目住
沱永有右衛門栄春
法名浄蓮香岸敬書

拔一切業障根本得生浄土陀羅尼
曩謨阿彌多婆夜哆他伽跢夜哆地夜他阿彌唎都婆毘
阿彌唎哆悉躭婆毘阿彌唎哆毘迦蘭帝阿彌唎哆毘迦
蘭哆伽彌膩伽伽那枳多迦隷娑婆訶



伝快慶作　池永家本尊「阿弥陀如来立像」

『胎内蔵縁起』冒頭

☆

千呆和尚自筆『彌陀夢感記』は千呆が道雲に依頼されて撰文したものである。一巻は、巻頭に黄檗四代獨湛性瑩和尚が「心所感」と横書きに大書した一紙を置き、次いで五代高泉性敦和尚撰文自筆「開光偈」を継ぎ、さらに六代千呆和尚撰文自筆『彌陀夢感記』を継いで一軸一巻としたもので、次掲する『池永家傳阿弥陀佛縁起』とほぼ同形同寸の装幀で二巻揃とし、金泥篆書体で「本尊縁起　弐巻」と記した朱漆塗の桐函に収められている。この二巻揃の室礼と函書は道雲自身によるものと思われるが、二巻ともにその表紙に外題書名はない。

印

心
感所

獨湛　印　印

池永浄蓮清士得安阿弥所造接引阿弥陁如來聖像請慶讃開光稽首西方大教主光明無礙照河沙倒垂金臂垂慈眼接引羣生令上七宝之蓮華既然如是今日又奚須特地作此開光佛事寧不庄労乎雖然以筆點云也少者一點不得

元禄乙亥八年七月十一日

黄檗第五代高泉敦敬書　印印

彌陀夢感記

夫鐘在扣則鳴物有感則應理之因然況佛菩薩番慈救世一切衆生苟能至心頂禮至懇哀求而不冥應者無有是處所以云現身刹土無感不應茲者有英士姓池永字浄蓮為人聰敏篤信佛乗其祖父榮知居士廼武州江都之人幼而喪父為慈母光圓所育元和九年甲子之夏榮知年十有二歳値隣街有賊入于商家竊白子若干商人急到追捕賊無地逃去遂突入榮知門内自後經去其事訴聞于公府乃命人査驗咸謂賊藏某人之家必要他尋捕此賊可也不然公府自有責罰矣光圓聞知深以為憂祈神誓佛曰神佛有靈願為我脱此災難一昔忽夢有一沙門以弥陀像與之謂曰你當供養此像恭敬頂禮不倦則當解脱災難而永保家門言訖而去光圓忽醒心竊乭之甚為竒特翌日果有一僧携弥陀聖像至長二尺五寸梵相竒古告光圓曰我是武蔵州八王子村之僧也斯佛乃良工安阿弥所造感你信心之至切今則與你ニ當禮敬供養可也遂去光圓嘆曰莫非疇昔所夢之僧歟不圖佛之感通以至于斯由是信心恭敬孜ニ不已既而家門無事脱其災難蓋得此像後其他靈驗不測亦不一矣又有司香火老尼一日失錢若干尼甚惡之乃誓佛曰若盗者在此門中願以佛力使知其人中有一婢奴手指忽生大腫痛不可忍自告其事後而腫自愈或有病眼者祈而愈焉往ニ有之明暦丁酉年江都大出火土屋石室悉為煨燼然而藏像之庫復免其難其靈應之甚實難罄竹是故一切衆生聞其名覩其像莫不禮敬歸命其感應道交豈可以意識而思議哉浄蓮英士一旦發心重到修飾於是元禄乙亥八年之秋嘱名工法橋祐正修而飾之甚加荘厳而況敦請佛國高和尚慶賛開光茲寓書來請余為記因述其顚末如此

戊寅孟夏下浣念有三日也

臨濟正傳三十四世

黄檗第六代沙門安千呆老人書於頤指方丈印　印

☆

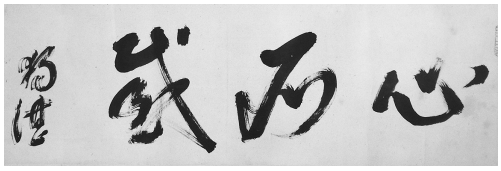
道雲撰自筆『池永家傳阿弥陀佛縁起』一巻は絵巻で、表紙に外題書名はない。画中に「狩野梅春筆」とあって、深川水場狩野派狩野梅春旭信（一六八四―一七四三）の筆と知れる。四つの絵場面がある。

〔絵①〕薬鋪店頭の光景。荷車・馬で荷を運ぶ者たち・旅芸人・按摩、また追われる白昼盗賊たちが店脇の入口に逃込む様子を描く。

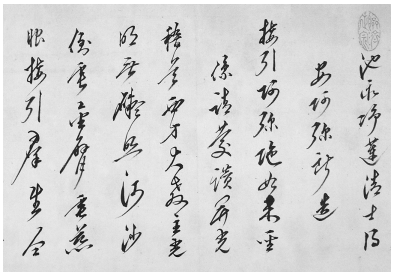
〔絵②〕八王子居住の僧が麦藁の包を解き、台上に安置した金色二尺五寸の阿弥陀如来像を披露する様子と伏し拝む光圓尼とその子栄知らを描く。

〔絵③〕老女の貯めた香華の施財を偷んだ下女たきの指が腫れ苦しむが、如来に先非を発露懺悔すると忽ち悪腫が治癒した様子を描く。

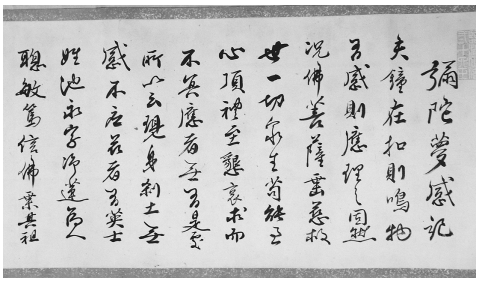
〔絵④〕元禄八年（一六九五）七月、如来像修復完成後、開光慶讃法要を黄檗五代高泉和尚大導師となって大衆と執行する場面を描く。左下に狩野梅春筆の署名がある。



獨湛揮毫三大字



高泉筆「開光偈」



千呆筆『彌陀夢感記』冒頭

池永家傳阿弥陀佛縁起

我家に代こ傳へて安置し奉る阿弥陀佛の靈像は其應験恰も真佛のことし故に一族擧りて尊崇し奉る者也往昔感得の由緒を尋ぬるに沱永の二世栄信と云る人元和九年癸亥の初秋に身まかりぬ其一子栄知十二歳成けれは家務を営むに絶す其毋髪をおろし光圓と号す素より佛神を深く信し貞実にして能婦道を守り家を治め栄知の成長を待其家を續しめんと日夜心を碎きて養育せりある时隣町の商家へ白昼に賊猥にかけ入白銀を抓ミ取逃去急に追れて我門内に入垣を破り後徑より逃出ぬ人こ是を尋ね求めしに見失ひけれは彼商人此事を公庭に訴へけり賊門内に入しを取逃せる事なれハ池永の家に就て僉儀有へしと人こ沙汰しけれは光圓是を聞しより深く歎き悲ひ自ら佛神に祈念して故障を遁れしめ給へと丹誠を尽しけり

道雲筆『池永家傳阿弥陀佛縁起』冒頭

（絵①　店頭光景）

其比光圓一夕夢見らくいと氣高き僧の阿弥陀佛の像を捧け來り此尊像を随身供粮し奉らハ現に災難を除くのミならす子孫も亦栄へて共に一佛土の勝因と成へしと告給ふと見て覚ぬ光圓実有難き事哉と思ひ心中に歡乭し現に待事有かことし然るに翌朝黒衣を著たる僧の阿弥陁陀仏の像を麦稈に包ミ椋の木の枝をあミて外を圍ひたる苞苴を負て庭に入來り是ハ安阿彌の作と傳へし霊佛なり老尼の信心切なるよし遙に傳へ聞侍しまゝ此尊像を讓與せんか為に携へ來れりと云時に光圓過し夜の夢を思ひ合せて信心肝に銘し急き拜受し坐鋪に請し入先本尊を机上に安置し是を拜し見奉るに御長貳尺五寸金色の尊容なり梵相竒古にして夢中に拜し奉る形相に逡ふ事なし不思儀の思ひを生して感乭の泪に噎ひなから御僧は何國より來り給ふにやと問は八王子の過りに住居する僧なりと云り然らハ暫く我家に留錫し給ひて此尊の由來をも委く語り給へかしまつ今朝麁菜の齊を参らせんと申けれは此あたりに知人あり齊の出來る間に音信來んとて出給ふ日ふくるまて待居奉れ共角て見え給はすいか成化人の昕為成らんと怪くも貴く覚えて此尊像を珍藏供養し奉る事淺からすして益信心を増進せり扨無質の障も程なく雲の晴行かことし先祖より七代いま百二十年の久しき年月を子孫恙なく相續しけるも全くこの尊像の護念ならんと頼もしくこそ覚ゆれ

（絵②　八王子の僧安阿弥作二尺五寸の金色阿弥陀如来像を齎す）

爾しより以來種この霊験是を記すに暇非すいかなる故にて眼を病る人祈念して其しるしを得る者多かりき又香華に仕へし老女ある时仏前の施財を偷まれて其身の不義に成らん事を悲しひ其人を告知せ給へと一心に祈りけれはまきと云る下女の指忽ち大に腫苦痛忍ひかたし故にミつから先非を發露懺悔しけれは悪腫も頓て愈たりまた明暦三年丁酉の年武城の大火にハ都て土藏なとも殘る處稀なりしに此本尊を納め奉りし文庫恙なかりけれは偏に霊像の威德ならんと不思儀の思ひをなす人多かりき

（絵③　施財を偷んだ下女たきの指腫れるが如来に祈って癒ゆ）

此尊像もと金色なりしか星霜年ふりて其躰黒ミさせ給ふ全身に損し給ふ処なしといへとも所こ浮上りて下地柔に見へ給ふを或人予に云けるは此まゝ指置給ふ共いかて損壊し給ふ程の事ハ有ましけれと末の久しき事を思へはいま是を新に修覆し荘厳し給ハゝ年月の過るに隙なし程なく又殊勝の古佛と成せ給ふへしとすゝむ然と云とも佛意計りかたきか故に予一七日の間精進潔斎して御鬮を窺ひ奉るに修覆し奉るへき由の鬮上りけれは元祿八乙亥の年佛師法橋祐正を我家に招き工料を定めす如法に修覆荘厳し終れり其比黄檗高泉和尚賜紫の御礼を大樹君へ謝し給ハんとて江府へ下向し給ふ折からなれは幸と悦ひ大衆と共に請し奉り慶替點眼の儀式を乞奉るに和尚開光の法偈を唱へ供粮懇に成辨せり。又相州塔の峯の中興融辨上人は淨家の老德にて坐しませハ重ねて請し奉り開光の法事を修せしむ又三田佛乘院良重法印を請し奉り真言秘密の開眼をも成せり

（絵④　高泉和尚大衆と慶讃法要を執行す）〔狩野梅春筆㊞〕

黄檗才四代獨湛老和尚は永明虎角の禅に習ひて常に西方の要旨を示し給ふ一方の大導師なり此本尊感得の縁由を遙に傳へ聞給ひて心所感の三大字を書與し給ふ是を巻頭として次に第五代高泉和尚開光の偈末に才六代千呆和尚の製

作し給ふ縁起を並へて黄檗代と唐僧の文章を一軸として我家の什珎とす然共明語にて見安からす又俗に通し難けれハ予是を和語に綴り亦其品を画に書しめ文字知ぬ人までも會得し安からしむる者なり熟思ふに我家門久しく相續し侍る事も偏にこの本尊の護念ならんと深く信仰し奉る者也家名相續せん人第一に此本尊を崇敬供養し奉るへし若麁略に仕奉る子孫あらハ必家門長久成難からん殊に代この先祖崇敬し奉る尊像なれはその子孫として不敬を致すは先祖の心に遠ふか故に不孝不義とも成へし沱永氏の子と孫と家の長久繁栄に随ひて末なかく崇むへし尊むへしこれ我志求する處なり此本尊の縁起嶋田白巌寺の明幢和尚所製の佛神感應録後集五の巻にも委くしるし給へり

五十年ハかり前つかた海福寺二代獨本和尚諭して曰く懸る靈佛を俗室の塵にましへ置剰へ化他の利益もなけれは我寺に鎮置せんにハしかし然らハ別に阿弥陀堂を建立し安置し奉らんと宣ふ海福寺は我祖父祖母の開基にてことに獨本和尚ハ肉縁有て何事も其旨に背き難けれ共此本尊を他處に移し奉る事一族ミな惜ミ奉り又佛の内意も計り難き故御闔を揚けれハ其まゝ我家に坐しまし給ふへき御闔おりける故其沙汰も空しく止ぬ昔は家門の事につき決し難き事共をハ必す本尊へ御闔にて窺ひ奉り佛勅に任せりと聞是等の事跡をも書殘さハ子孫信仰の一助にも成へきかと因に記し置而已

栄信居士は信心深き人にや惠心僧都真筆三聖の画佛古幡隨白道上人霊巌雄誉上人等の授与名号別に雄誉十念名号左右に發願文と一枚起請と書かせ給ふ三幅對今にあり右本尊にそへおき永く家珎と成へき者なり

享保十年乙巳冬十二月四日

池永五代道雲栄春行年六十一歳

手敬識於清秀南軒

狩野梅春画「高泉慶讃法要執行場面」

法名瑩誉蓮邦道雲居士

別号一峯俗名有右衛門

沱氏 榮吉 衛 雲

高泉和尚開光の偈に浄蓮清士と書せ給ふは道雲の事也以前獨本和尚授戒の時浄蓮香岸と法名付給ふ其後洞空慈泉和尚に依て三十七歳にて剃髪せし時香岸を道雲と改め給ふ又上京の折から深草慈空律師に相見し三歸五戒を授給ふ時浄蓮を蓮邦と改めさせ給ふ則この御寺山上に髪塔を建置ぬ誉号ハ増上寺雲卧大僧正より五重相承の時に瑩誉と付させ給ふなり

※

右に池永家伝来の守本尊阿弥陀如来像の縁起三種『胎内蔵縁起』『彌陀夢感記』『池永家傳阿弥陀佛縁起』を翻刻紹介したが、字句に多少の出入りがあるが内容に大きな矛盾はない。興味深いのは道雲撰『池永家傳阿弥陀佛縁起』の後半部が道雲自身の事跡に関わる記述であることだ。道雲は元禄八年（一六九五）仏師法橋祐正をして阿弥陀如来像を修覆荘厳し、折しも賜紫の礼に江戸に来た高泉和尚を恃んで慶讃法要を営んだ。その光景を狩野梅春が描いたのだが、導師役はもちろん高泉として、そのとき三十一歳のはずの道雲は廊下を背に居並ぶ帯刀三人のうちの左端の人物であろうか。また二人の子が見えるが内室の姿がない。既に逝っていたのであろうか。道雲は後添えを迎え、知命五十のとき家督を六代栄陸に譲っているが、栄陸がどちらの所生か知れない。いずれにしても高泉のほか人物が特定できない。なお高泉は元禄八年には二度江戸に来ている。五月と六月だが、二度目の登城の時すなわち六月七日将軍綱吉に召され、陞座説法して金巾を賜った。退城後感冒に罹り綱吉の遣わした医に診療を受けたが急ぎ黄檗に帰山し、その年十月十六日に示寂した。しかし「開光偈」には元禄八年七月十一日の日付がある。「開光偈」は法要の冒頭で朗読されるはずのものだから、とすると退城後罹患前に、あるいは罹患後無理をおして「開光偈」を書き、日付と同じ元禄八年七月十一日に慶讃法要を執行したものと推量される。

黄檗高泉による慶讃法要は懇ろなものであったが、道雲はさらに相州塔之峯阿弥陀寺中興融辨上人を請じて浄家木食の、次いで旭弁戝天を本尊と

する三田寺町の祈禱寺院仏乗院の良重法印を恃んで真言秘密の開眼法要を営んでいる。良重法印は不明だが、木食弾誓開山の塔之峯阿弥陀寺中興融辨は、これも弾誓開山の伊勢原一之沢浄発願寺中興四世木食空誉禅阿唱鉄（一六三六―九四）から相伝を受けた塔之峯阿弥陀寺七世三誉融辨即心誓阿のことである。当寺には融辨木像が祀られ、天和三年（一六八三）十二月九日に空誉唱鉄から受けた「弾誓流初三重切紙」「弾誓流後三重切紙」「血脈」等が残る。[12]京都古知谷阿弥陀寺には「相州塔峯七世常念佛成助三譽融辨上人（表）文政十亥年九月九日（裏）」と記された位牌が祀られている由だ[13]から、弾誓一流において相当に崇敬せられた人物であったと思われる。なお位牌に「常念佛」とあるのは、それも空誉唱鉄から相伝されたものであろう。とすればそれは東叡山寛永寺護国院に相伝された護国院釈迦堂常念仏であったはずである。[14]釈迦堂常念仏は徳川家康と慈眼大師南光坊天海に由来し、大師の直弟子風山生順（一六五六歿）が護国院を開基して流通したもので、空誉は生順の弟子であった。空誉はこの釈迦堂常念仏をもって弾誓歿後荒廃していた浄発願寺を中興したのである。なおまた道雲の墓所田島山受用院はかつて浅草にあった田島山誓願寺の塔頭であって、その誓願寺はもと小田原市所在の浄土門寺院妙光山誓願寺で、小田原を本貫の地とする池永家はその小田原居住時代からの誓願寺檀徒であった。[15]塔之峯阿弥陀寺には田嶋山誓願寺賜紫沙門真誉辨教筆の弾誓上人像画幅が残り、誓願寺と塔之峯の交流が深いものであったことを示している。

道雲は池永家二代栄信が信心深い人であったと記し縁起絵巻を締め括っている。栄信は一子栄知を残して早世したが、今我が池永家に伝わる恵心僧都源信真筆の三聖画はじめ幡随意院白道上人・雄誉霊巌上人等の受与名号や、雄誉上人筆の十念名号・發願文・一枚起請文の三幅対は栄信の遺品であると伝え、巻尾に「享保十年乙巳冬十二月四日」と日付し、「池永五代道雲榮春行年六十一歳／手敬識於清秀南軒／法名瑩誉蓮邦道雲居士／別号一峯俗名有右衛門／池氏榮春　道雲」と実名・年齢・住居・法名・雅号等々を記して当時点における自身存在の証明とし、さらに追而書して高泉和尚「開光偈」に浄蓮清士とあるのはわたし道雲のことで、それは以前獨本和尚から受戒したとき浄蓮香岸の法名を受けたのだ。その後三十七歳のとき上京して洞空慈泉和尚に随って剃髪したとき香岸を道雲と改め、深草慈空律師に相見して三帰五戒を受けたとき浄蓮を蓮邦と改め、その際寺の山上に髪塔を建て置いた。なお瑩誉というのは増上寺雲臥大僧正より五重相承を受けたとき頂戴した誉号であると記している。

※

三村竹清が「池永氏の家には靈佛の彌陀像があり、一峯が特信者で朝夕の念誦を勤めるので、近所の人や知人では本町のお寺と云つてゐたさうだ」と逸話している。開眼法要を二度ならず三度までも営んでいることや、右の追而書を見れば道雲が竹清の伝える以上に、またみずから讃する二代栄信に劣らず増して信心深い人であったのは明らかだ。折節を重んじ篤信の善業を積む道雲が霊仏弥陀如来像修復後ちょうど三十年目、自身の還暦に重なる六十一歳のときに『池永家傳阿弥陀佛縁起』を撰述したのは象徴的である。その一節に、五十年ほど以前つまり道雲十歳のころの思い出を語っているからだ。海福寺二代獨本性源和尚から阿弥陀仏像を譲るよう諭されたが、しかし池永家は談義のうえ仏意を識るために御闔を揚げたところ、阿弥陀仏像はそのまま我が池永家に安置しておくべき仏勅が下りたので結句断ったと記し、「昔は家門の事につき決し難き事共をハ必す本尊へ御闔にて窺ひ奉り佛勅に任せり」と家風を伝えている。この一文からも、『池永家傳阿弥陀佛縁起』絵巻製作の意図が単に如来像の縁起を記すためだけではなく、子孫の知っておくべき家門の事跡、子孫の守るべき家風を示しておくことにあったのであって、すなわちそれは道雲の遺訓であった。

想えばあの白昼強盗事件が池永家最大の危機であった。道雲はそう考えていたに相違ない。生まれる以前の出来事を今しがた見てきたように綴っている。元和九年（一六二三）二代栄信が早世し、遺された夫人光円尼が一子栄知を懸命に養育していた某日、池永家は無辜の災厄に巻き込まれた。栄知十二歳の時である。白昼隣町の商家に押し入った盗賊は白銀を奪って逃走し、池永家薬舗を通り抜けてまんまと逃げ失せた。被害商家は池永が盗賊を捕縛しなかったことをもって共犯を疑い僉議あるべしと公訴した。これをきっかけに事件の余波は広がり悪評の波が襲って池永家は窮に頻し家存続の危機に直面したのだった。光円尼は歎き悲しみひたすら仏神に無

事を祈念し丹誠を尽くした。一夕、光円尼の夢に気高き僧が阿弥陀仏像を捧げ来たり、「この尊像を供養すれば災難を除き、子孫も栄えて浄土往生も叶うべし」と告げた。夢覚めた光円尼は夢告に歓喜し、その日の来るのを待った。するとはからずもその翌朝、八王子在という黒衣の僧が麦稈に包んだ阿弥陀仏像を背負い来て、「この尊像は安阿弥快慶の作と伝える霊仏である。老尼の信心が切なるよしを伝え聞き、こうして携え来たのだ」と云い、朝齊のできる頃にまた来ると出たまま二度と戻らなかった。阿弥陀仏像を机上に安置し拝み見ると、二尺五寸金色の梵相奇古の尊容は夢中に見た形相と違うことがなく、さぞや化人のしわざだろうと感嘆の泪に噎びながらこの尊像を珍蔵供養すると、ほどなく疑いも晴れたのだった。道雲はそう記し、「先祖より七代[16]いま百二十年の久しき年月を子孫恙なく相續しけるも全くこの尊像の護念ならんと頼もしくこそ覚ゆれ」と結んでいる。

おそらく二代栄信と光円尼のころの池永家薬鋪は安定してはいなかったのだろう。絵巻には齎された阿弥陀仏像を拝する一家が描かれているが、五体投地して伏し拝み仏を恃む光円尼の姿がそれを象徴している。さらに明暦三年（一六五七）の武城大火で大方を失ったが、しかし星霜年経りようやく五代道雲のころに経営は安定したのであろう。家代々の厚信を証するように金色の阿弥陀如来尊像は黒ずんでいたが綻びはわずかに見えるばかりで、このままにしておいてもすぐには損壊することもあるまいと思っていた矢先、ある人が「末の久しき事を思へはいま是を新に修覆し荘厳し給ハヽ年月の過るに隙なし程なく又殊勝の古佛と成せ給ふへし」と勧めたという。道雲はそれを容れて発起し、精進潔斎して御鬮を窺い、元禄八年仏師法橋祐正を招請して工料を定めず如法に修覆荘厳させ、さらに黄檗高泉和尚・塔之峯融辨上人・三田仏乗院良重法院を恃んで三度の開眼供養を営んだのである。この顚末を知れば道雲代には池永家の薬鋪経営は極めて安定したものになっていたと容易に推量できる。池永家が伊勢堀の宅前に木橋を架設[17]したと伝えられるが、あるいは道雲代のことではなかったか。淡々と事実を記す道雲の姿勢のなかに、家存続の重圧を負いながらも日々の努力でこれを克服し、知命五十で家督を六代栄陸に譲ることができた安堵と、重責を果たし得たという聊かの誇らしさを読み取ることができる。推量にも自制が必要なのは承知だが、敢えて云えば、おそらく道雲は紀伊国屋文左衛門（一六六八―一七三四）や奈良茂左衛門五代泰我（一六九五―一七二五）のような巨万の富を得た大尽豪商とは別人格であったように思われる。同時代の、それも文左衛門は八丁堀に、奈良茂は箱崎町・深川黒江町に本拠を占めていたのだから知らぬはずはなく、近隣にある彼らの動向は嫌がうえにも常に見聞していたに相違ない。商いも遊芸もその規模に大小の差はあるが、彼我を省みてみずから市隠の雅号を好んだ理由が得心でき、自編百冊の印譜に数十また数百の自刻篆印を一顆ずつ倦まず捺し続ける市隠道雲の孤影が彷彿する。

※

道雲はさらに深川永寿山海福寺二代獨本性源和尚（一六一八―八九）が肉縁であり、海福寺の開基は自分の祖父祖母だと記し、いずれ薄れゆくだろう父方実家との関係を明かしている。龍潭道珠編『海福獨本和尚語録』（宝永五年〈一七〇八〉刊）・浄寿編『檗宗譜略』（元禄十二年〈一六九九〉刊）等によると、永寿山海福寺を開基した道雲の祖父祖母は新山仁左衛門法名昭心性月とその妻法名慈蔭性雲で、性雲は獨本の姉、姉弟は安房新井の法木氏の出自という。『深川寺社書上』[18]（文政六年〈一八二三〉八月差出）によると仁左衛門は道号を浮木といい、明暦二年（一六五六）三月二十九日八十五歳で歿し、性雲禅尼は寛文八年（一六六八）六十一歳寂というから、二人は三十余歳も離れた夫婦であった。道雲には兄がいて出家して不著また黙爾と称し、浄慧に随って仏師瀧河順正の助勢をした人である。自坊は海福寺であったのだろう、獨本が相州大井所在北条政子創建という石蔵山浄業寺を中興開山したとき檀越のごとき助勢をしている。道雲が獨湛・高泉・千呆また浄慧など黄檗禅の高僧たちと交友を結べたのも父方新山家と獨本の縁力によるものと思われるが、ことに祖母の舎弟獨本和尚から受けた影響は大きかった。『池永家傳阿弥陀佛縁起』に「獨本和尚ハ肉縁有て何事も其旨に背き難けれ共」と記し、本尊の譲渡を固辞したのだったがしかし、幼少のころ兄不著とともに寺住まいを経験もした道雲には、戒を受け法名浄蓮香岸を与えくれた肉縁大叔父獨本和尚の諭旨に常は背くことができなかったのである。なるほど獨本は道雲やその肉縁にとってばかりではなく時代の偉人であった。海福寺は万治元

年（一六五八）十一月、六代将軍家綱に謁見するため江戸に来た隠元隆琦を自坊深川寺町の自肯菴に迎えた獨本が、これを改めて永寿山海福寺とし開山に隠元を招請して起立したもので、江戸における最初の黄檗派寺院だった。二代獨本は元和元年（一六一五）安房新井の父法木氏・母大竹氏の出自で、両親は男児誕生ならば僧侶になすべく期していたという。元和九年（一六二三）六歳にして江戸愛宕曹洞宗萬年山青松寺春道に剃髪を受け、のち遊歴して寛永二十年（一六四三）二十六歳のとき洛北臨済宗大雲山龍安寺龍渓性潜に参じ、正保四年（一六四七）三十歳のとき江戸に戻って有縁の真言僧道安法印から譲られた深川自肯菴に曹洞僧として住し、承応二年（一六五三）維摩経を講じた三十六歳の夏、実力不足を識って八王子石戸山に隠れた。明暦元年（一六五五）三十八歳のとき隠元来朝の報を聞き、諸徒を率いて長崎に行き隠元に参謁し、寛文元年（一六六一）黄檗山開創の際には四十四歳にして初代知識となり、同三年の夏安居には堂主、隠元から大戒を受けた。同十三年正月隠元は獨本の登檗を待ったが間に合わず四月三日に示寂した。天和元年（一六八一）六十四歳のとき北条政子の古跡相州石蔵山浄業寺を中興し、同三年開山した。以来同寺臥遊亭に住し、元禄二年（一六八九）八月十一日遺偈を記して七十二歳で示寂した。獨本は示寂する十日ほど前、侍僧海音等に命じて自著自稿をすべて焼き捨てさせたが、師の意思を予め知っていた海音は数巻を写しおき、のち龍潭道珠が編じて語録を版行した。海福寺は獨本歿後の宝永六年（一七〇九）五代大仙のとき江戸黄檗派の触頭寺院となり、百五十年を経た天保年間には『江戸名所図会』にその境内図が描かれるほどの大寺となった。浄寿撰『黄檗宗譜略』[19]は「爲レ人眞率ニシテ天性寛仁威愛兼抱テ有二大人相一」と評伝している。略歴を辿っただけでも獨本の行業の人並でなかったことが知れる。なお示寂前日の八月十日、獨本は檀越新山常閑・池永有右衛門両人の見舞を受けている。池永有右衛門は道雲として、新山常閑は誰だろう。

道雲の父方新山家の宗教的環境は獨本和尚を中核にして黄檗の風そのままであった。道雲が書道や篆刻を知り傾倒し、その道に没入した背景には実家を覆う黄檗世界があったからに相違ない。しかし道雲は池永家伝統の浄土門に帰信した。その帰依心表出の端的な証左が先祖伝来の阿弥陀如来像の費用を定めぬ如法の修復であり、また黄檗・浄土木食・真言祈禱による三度の開眼法要である。それはまた当時池永家が置かれていた現状をよく示している。檀家寺誓願寺の浄土門を本格とし、古来親交する真言に加えて外来最新の黄檗文化を受け容れているのである。それは当時における一般の風潮であり、またおそらく薬種商という業種が本来的に有する進取の気風に通ずると思われる。そうした中にあって道雲その人は浄土信仰を深めていった。それは増上寺三十四世雲臥独青大僧正から五重相伝を受け誉号を授けられていることからも証せられる。雲臥（一六四二―一七一〇）は徳川五代将軍綱吉とその母桂昌院の帰依を受けた人で、将軍家菩提寺増上寺の経営と宗学教化ともに優れた傑僧だった。道雲は誉号頂戴以前に、はるかに上京して洞空慈泉に剃髪を受け、深草真宗院の慈空通西から三帰五戒を受けている。洞空慈泉（一六四五―一七〇七）は洛中新京極の倒蓮華寺すなわち恵心僧都の妹安養尼ゆかりの西山浄土宗禅林寺派八葉山安養寺の三十六世で、『談義もどり』（元禄三年〈一六九〇〉刊）『女人往生章』（延享元年〈一七四四〉刊）を著して女人往生を鼓吹した人であるが、近世戒律復興の拠点近江東方山安養寺の開山戒山慧堅撰『盂蘭盆獻供儀』[20]に序文を寄せているように、自身もかつて野中寺派に属し、『浄土護法論』（延宝七年〈一六七九〉刊）『菩薩戒疏順正記』（元禄五年〈一六九二〉刊）を著して浄土宗徒が無戒を誇るのを批判した浄土律僧であって、道契撰『續日本高僧傳』[21]巻九「城州安養寺沙門慈泉傳」に「禮三覺律師於二五智峯一。受菩薩戒。」とあるように覚律師[22]から菩薩戒を受けた人である。五智峯は弾誓上人直弟木食但唱の中興した蓮華寺であろうから、慈泉は木食戒の影響を受けていたと思われる。その慈泉撰『順正記』に序を寄せた慈空は八葉山安養寺の前住であって、転じて西山浄土宗深草派根本山真宗院の五十九世を継いだ慈空通西（一六四六―一七一九）である。性憲・蓮居とも称し、戒山慧堅の師慈忍慧猛から菩薩戒を受けて真宗院を律院に改め、『蓮門小清規』（貞享二年〈一六八五〉刊）『臨終節要』（貞享三年〈一六八六〉刊）『重修蓮門課誦』（貞享三年跋）を著した人で、『續日本高僧傳』巻九「城州深草眞宗院沙門性憲傳」に「自嘆曰。澆代法幢傾倒。異見蜂起。如二本宗輩一。濫托二佛願一。不三曾倣二僧儀一。偶覩二奉律士一。卽謂二違宗雜修人一。不レ知二戒是佛門通軌一。嗚呼。吉水正流。混濁久矣」と伝えるように浄土律の退廃を嘆じ、門弟の洞空慈泉と

ともに浄土律の堅持を首唱した浄土律僧の魁星だった。「晏二坐一室一。凝二心浄域一。四弘誓願。称名不レ歇。日講二往生要集一。勸二化道俗一。黄檗獨湛。佛國高泉。方戀二蓮社一。來結二法盟一。」というから、慈空浄土律の浄業とその精舎は獨湛や高泉にとってもまことに心惹かれるものであったのである。道雲が慈泉・慈空に親近した理由、またその仲介の経緯云々は容易に推して知られる。

※

道雲自筆文書に『遺物之覚』（仮綴一帖）がある。歿する四ヶ月前の元文二年（一七三七）三月十七日付で、遺愛の仏像・掛軸・衣服等々とそれを誰々に遺し置くという書置であるが、中に次の一項がある。

一　當广表打三聖画大曼陁羅珠
　慈空比丘御添状有日本ニ
　此上品珠者黄檗悦峯和尚と
　二顆ならてハ他ニ無之也
　大切ニ供養子孫ニ傳可被申候
　　およし江

右の「當广表打三聖画大曼陁羅珠」というのは曼陀羅丸のことである。それには慈空比丘の添状があるという。慈空は道雲に三帰五戒を授けた深草真宗院慈空通西に相違なく、おそらく元禄十四年（一七〇一）受戒の折に譲られたのであろう。黄檗悦峯和尚は四代獨湛の直弟八代悦峯道章（一六五五―一七三四）のことである。推量するに、薬種を商い正しい信心を実践しようと志す道雲にとって、曼陀羅丸は求めて止まない霊薬霊宝であったに相違ない。獨湛や妙幢浄慧から曼陀羅丸の由来や霊験利益を聞くたびに、道雲は思いを深め希求していたことだろう。だからこそこれを得て晩年まで大切に供養し秘蔵していたのである。傍観すれば獨湛も浄慧も、當麻曼陀羅や曼陀羅丸に対する関心は尋常の域を超えているように見える。獨湛は元禄十年（一六九七）三月當麻寺を詣し當麻曼陀羅を見て随喜し、これを故国に紹介し流通せしめる意図をもって同十四年十二月『日本大和州當麻化人織造藕絲西方縁起説』一巻を著し、嗣法の弟子悦峯道章と華頂山知恩院の良照義山（一六四八―一七一七）の助力を得て開版した。獨湛のこの営為を妙幢浄慧は『佛神感應錄』後集巻第十二四「蓮社ノ七祖ノ事付タリ當麻ノ曼陀羅震旦ェ渡事」に記し、「獨湛は當麻曼陀羅を拝閲して感動し、これを摹写して故国に贈り、かの地で板に刻んで巷間に流布し、もって衆生に勝縁を結ばしめん素懐を抱き、ために自らあらたに縁起を草して時節の到来を待っていたのであって、それが数十年を経て嗣法の弟子悦峰道章の助力を得て曼陀羅一幅を摹写せしめ、これに自艸の縁起を添えて故国の有縁褚山王居士に送って後事を託したのだ」とその功業を讃している。この浄慧の一文から、獨湛の初度當麻寺参詣を元禄十年とする通説[23]は否定されるのであって、隠元に随従して承応三年（一六五四）七月に長崎に到着して間もない某日に獨湛は當麻寺に詣し當麻曼陀羅を拝閲して感動のあまり、すでに存した「當麻曼陀羅縁起」とは別にみずから新たな「縁起」を草してもいるのである。

獨湛は『日本大和州當麻化人織造藕絲西方縁起説』[24]の巻末に「此ノ圖再裱ノ之時掃二下久年蓮絲ノ之粉一ヲ將サニ二數升一遂ニ製レ之爲レ丸ト病人乞覓頂戴スレハ病多クハ痊愈ス臨終散亂ノ之人頭ニ戴キ手ニ捧クレハ多ク晏然トシテ而終ル」と記している。曼陀羅丸とその霊験利益のことである。これについても獨湛は右『西方縁起説』より以前、元禄十一年（一六九八）六月に『當麻曼陀丸塔寶引』[25]一巻を著し、當麻曼陀羅から散り落ちた糸くずを集めて丸めた曼陀羅丸を宝塔に収めた経緯をわずか六百字ほどの短文で伝えている。その要所を摘出すれば、「戊午之春京師大雲性愚上人常禮此圖以欲修理有信士久圓者聞之大喜捨貲以助於是同草山慈空上人高足寶雲重至當麻為之修理」「寶雲鳩集遺落塵絲採拾金藏諸粉練而爲丸計有千萬且顆僧靈觀就請乞與既得之作寶塔珍藏」「觀復後慈空上人得之供事一日啓予數言示諸後賢」「此寶塔々様似育王中間二上岳化尼若飛颺金珠明顆々星宿」等々とあって、獨湛がこの『引』を撰述したのは深草真宗院の慈空上人の示唆慫慂によるものであったと知れる。獨湛は戊午之春（延宝六年〈一六七八〉）というが、洛東龍池山大雲院六世品蓮社高誉性愚称求（一六二九―一六八六）による當麻曼陀羅の修復事業は延宝丁巳五年（一六七七）のことである。『高譽自筆之記録』[26]延宝五年閏十二月十五日条の一節に、

延寶丁巳五年二月二十七日洛陽沙門稱求拜瞻當麻寺大曼陀羅朽損敗壞不可言
遂歸洛慨然爲唱於是久圓居士及族弟如信居士輸淨財同年五月十四日創事寶雲
幸善勠力繕治之濺以染井水夙夜孳々無苦勞同月十九日夜變相有聲翌觀之則所
粘之蓮糸變相自然分離布板靈瑞奇異人知之閏十二月十五日其功畢嗚乎諸人克
勤彩華重輝功德豈可測哉

とあり、さらに募縁沙門を大雲院高譽稱求、檀主を中島七兵衞重次頓誉久圓居士・同作兵衞忠誉如信居士、表具師を蓮光寶雲法師・法橋念誉幸善と伝えている。曼陀羅丸は曼陀羅修復の余慶であるが、塵絲を集め、金粉を採り拾い、これを練って珠丸に創製したのは慈空上人の高足蓮光寶雲法師だったと獨湛は明かしている。淨慧がいうように寶雲はそうした技能に秀でた人で、語らい誘った表具師法橋念誉幸善（宏善）とともに曼陀羅丸千萬顆を淨製したのだった。獨湛は続いて、霊観なる僧がこの珠丸を乞い請け塔を作って珍蔵したが、霊観歿後はその珠丸塔すなわち當麻曼陀丸宝塔を慈空上人が得てこれを供養したと述べ、それの経緯を後人のために撰述しおくことを慈空上人から示唆慫慂されたと記し、當麻曼陀丸宝塔はまるでかの阿育王塔に似ていると感嘆している。仏滅後およそ一〇〇年後に現われ、仏教を守護し、インド亜大陸を統一したという無憂樹をその名の由来とする阿育王は多くの舎利塔を各地に造らせた。『阿育王伝』巻一・『阿育王経』巻一は八万四千といい、『雑譬喩経』巻上は「阿育王為祈求疾病痊癒。建一千二百寶塔。並毎日供養二萬僧徒」と伝えている。獨湛が當麻曼陀丸宝塔を阿育王塔に似ていると評したのは、曼陀丸宝塔が阿育王塔を承け継ぐもの、すなわち曼陀羅丸は仏舎利そのものであると考えていたからだ。

曼陀羅丸を仏舎利そのものと認識していたのは獨湛ばかりではなかった。曼陀羅丸の巷間流通の由来が性愚上人の慈悲業にあったことを主唱した大雲院義淵撰『當麻曼荼羅修復縁起[27]』（延享二年〈一七四五〉刊）にも窺うことができる。

古變相修覆の時久年亂離する所の藕糸の微屑及積凝する所の香煙の彩塵盡く拂ひ下し採り給ふに殆ど數升あり。性愚ひそかに思へらく、斯れは是安養の佛菩薩の大悲の手より出る所の物にして、實に娑婆濁世の末世未曾有の珍寶なり。縱令佛法非器の大逆無道の極惡人たりとも、若此一塵を心腑に流し下さば、往劫より積累する所の重惑業障も一時に蠲鎔して、弘願海中の蓮種を生ぜん事是疑ふべきに非ず。爰に於て遂に寶雲寺と謀りて慇に淨製の粘にて丸となし曼荼羅珠とす。是を有縁の道俗に流與するに、其至信の人々は、數日光明赫き或は色轉して五彩となり或は增長して大顆となり或は分發して小舎利と現ず。若妖怪悖亂沈に犯さるゝ人一度是を頂戴し少し斗りも咽に入るゝ時は忽ち不祥を去り正念に住し、或は快愈して善心を生じ、或は稱名して終焉を取り、如斯の大利益に遇ふ者世に多し。擧げて算ふべからず。皆是法如の一願より生じぬる事こそ難有けれ。

右の一文から、當麻曼陀羅修復という大事業に関わった僧たちをはじめ有縁の道俗、至信の人々が曼陀羅丸を舎利の化現と現認し、その霊験利益に驚嘆していた様子が彷彿する。曼陀丸宝塔を阿育王塔に擬える獨湛は、曼陀羅丸を舎利そのものと信じ、それは諸病をたちどころに快癒させる万能薬であり、安穏な臨命終時をもたらし往生極楽への直路に導く霊応の秘珠であると考えていたのである。淨慧は獨湛の思慮と営為を十分に理解していた。だからこそ『佛神感應錄』後集巻第十二四「蓮社ノ七祖ノ事」に獨湛の営為を賞讃し、『古今舎利驗論』巻下末十「曼陀羅丸ノ事　付タリ霊驗ノ事」に巷間道俗に流与された曼陀羅丸が衆庶に生じせしめた霊験利益譚を集録したのである。しかし淨慧は冷静だった。発願主高譽上人・施財主中嶋久圓等の淨業心を記し、深草蓮光寶雲法師の貢献を讃し、羽箒屋ナニガシ・金具屋夫婦・或信女等が受けた現益を筆録したが、それもこれも彼らが曼陀羅丸を信持していればこその歓得だったと注記するのを忘れていない。淨慧は蓮光寶雲と旧知だったのだろう。寶雲の師慈空通西と黄檗獨湛・仏国高泉また池永道雲等との親交ぶりをみれば、持律を好む淨慧が浄土律の本拠深草真宗院の主導者慈空とその門弟等と交流したろうことは容易に推量でき、そうであれば「曼陀羅丸ノ事　付タリ霊驗ノ事」に、寶雲が修復の技に長けていたこと、表具師宏善を語らい誘ったのは寶雲だっ

たなど、他に見えぬ所伝が載るのも得心がゆく。寶雲の直話だったのだ。しかし寶雲・宏善によって千万顆また数升も浄製せられた曼陀羅丸は、至心の道俗たちに付与され、また遥か海彼の地に送られて今や稀少のものになってしまった。「深草の慈空比丘から戴いたこの大曼陀羅珠は日本には黄檗の悦峯和尚のものと二つしかないこの上ない霊宝だから、大切に供養し子孫に伝えなさい。」道雲は娘およしへそう書き置いている。

以上わずかな知見と推量ばかりを重ねて妙幢浄慧の周縁、旧識の法友池永道雲の行実若干を記し、もって円環螺旋連鎖してまた重坐するがごとき人間交流諸相の一斑を述べたのである。

注

1 中野正明氏「『一心院覚書』紹介」（「鷹陵史学」十二号、一九八六年十二月）所載の翻刻に據る。

2 「浄土宗全書」第十七巻所収に據る。

3 「妙幢浄慧撰『佛神感應錄』翻刻と解題（六）浄慧の周縁⑤」（「学苑」第九三六号、二〇一八年十月）。

4 玉川大学教育学術情報図書館蔵。

5 蓮体録『當寺開山浄厳大和尚行状記』元禄六年（一六九三）条。

6 駒澤大学図書館蔵。

7 池永家蔵『池永道雲』所収「池永道雲と細井廣澤との親交」に據る。

8 水田久紀氏訓読校注「日本印人伝」（中田勇次郎編『日本の篆刻』所収。一九六六年十一月、二玄社）に據る。

9 国立国会図書館デジタルコレクションに據る。

10 松平君山（一六九七―一七八三）は尾張藩士。儒学者・地理学者・蔵書家。独学で博覧強記。門流を君山学派という。蔵書はのち藩に献上され今日に伝わる。

11 宝田正道氏『日本仏教文化史孜』（一九六七年五月、弘文堂新社）。

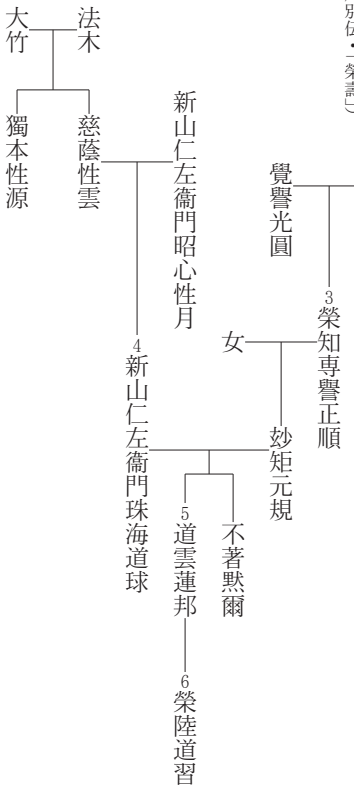
12 五来重氏「塔の峰本『弾誓上人絵詞伝』による弾誓の伝記と宗教」（『箱根町誌』第三巻、一九七四年三月、角川書店）。

13 大阪大学大学院生大崎瑠生氏御示教。

14 護国院蔵『東叡山護國院小傳集』（袋綴装一冊）「常念佛縁起」「空譽上人履歴」条。

15 『箱根町誌』第三巻の口絵に掛幅の写真が載る。

16 「七代」とするは不審。左に池永家系図を示す。



17 『江戸名所図会』巻一「伊勢町河岸通」の挿絵に「道しやう橋」が見える。『江戸砂子』は「道常橋」とし道常なる人が架けた由を記す。この道常は池永有右衛門のことだという（菅原健二氏「江戸・東京の川＝中央区の川（一）」《『京橋図書館郷土室だより』一六二号、二〇一八年十一月）。石川悌二氏『東京の橋』（一九七七年六月、新人物往来社）は『武江圖説』を引いて池永有右衛門の架橋という。寛文（一六六一―一六七二）初期の架橋のようである。

18 国立国会図書館デジタルコレクションに據る。

19 西尾市立岩瀬文庫蔵の無刊記本巻頭に「元禄庚午仲秋穀旦沙門洞空謹于雙丘之知足菴」とする洞空慈泉の序がある。なお元禄三年梅村彌白版には洞空序はない。

20 東京大学史料編纂所蔵本に據る。

21 大日本佛教全書第一〇四巻所収に據る。

22 覚律師は不明。あるいは覚彦浄厳のことか。浄厳は延宝二年（一六七四）三十六歳のころから盛んに京阪を往返し、歓喜院・仁和寺・高山寺・黄檗山等を径廻している。

23 「妙幢浄慧撰『佛神感應錄』翻刻と解題（五）浄慧の周縁④」（「学苑」第九三四号、二〇一八年八月）。

24 田中実マルコス氏『黄檗禅と浄土教』（二〇一四年二月、法蔵館）所載の翻刻

に據る。

25 田中芳道（実マルコス）氏「獨湛著の『當麻曼陀丸寶塔引』」（『法然仏教の諸相』所収。二〇一四年十二月、法蔵館）所載の翻刻に據る。

26 横井徹山氏編『當麻曼荼羅講説』（一九二九年六月、岸和田光明寺）所収に據る。

27 同前。

〔翻刻凡例〕

一、東洋大学図書館哲学堂文庫蔵『古今舎利驗論』三巻五冊本を底本とした。

一、可能な限り原文の表記を尊重し、明らかな誤刻もそのまま翻刻したが、巻末の「跋」のみ、その左右振仮名・送仮名・返点などの表記位置を整えた。

一、合字は「ㄱ」（コト）のみ採り、以外は通行の表記に改めた。

一、「己・已・巳」「玉・王」等の混用字体は文意をとって適字を置いた。

一、摺墨の濃淡等による判読不能の文字は字数分の空格（□）を置いた。

一、頭注は各話の末尾に一括して掲出した。

一、半丁ごとに丁数を示し、各話間に空行を置いた。

〔付記〕

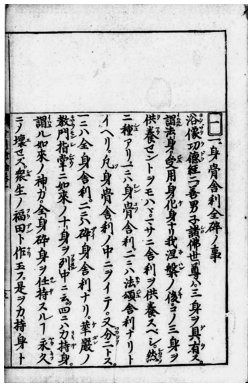
池永道雲家第十六代当主御夫妻並びに東叡山護国院住職御夫妻には御高配と御親切を頂戴した。本学卒業生寺津麻理絵・同岡本夏奈・日本語日本文学科三年生塚本紗英三嬢の御助力を得た。末筆御無礼ながら併せて御礼感謝申上げる。

〔追記〕

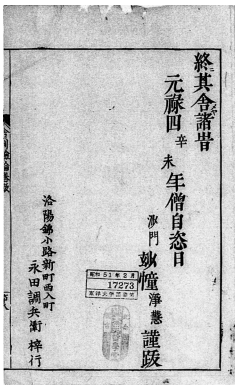
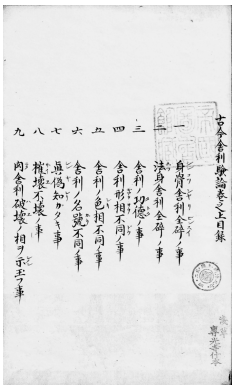
翻刻の底本には東洋大学図書館蔵の元禄四辛未年僧自恣日（一六九一年七月十六日）跋、永田調兵衛版五冊本を用い、国立国会図書館蔵の浅草専光寺旧蔵写本（袋綴装、全一冊）を参照した。浄土宗霊照山専光寺は世田谷区北烏山に現在し、喜多川歌麿の墓を祀って歌麿寺の通称で知られるが、おそらく六世厭蓮社欣誉上人心阿琳察（延宝八年〈一六八〇〉―元禄六年〈一六九三〉）・七世三蓮社照誉上人周阿鼎圓（元禄六年―享保元年〈一七四四〉）の頃に書写されたものであろう。

永田調兵衛版 第一冊表紙

永田調兵衛版 第一冊本文冒頭



永田調兵衛版 第五冊巻尾刊記



専光寺旧蔵写本 巻之上目録